



『シュフ ウシュフ』
photo: Mario Del Curto

TACT/FESTIVAL 2013 13年6月6日(木)~9日(日)

『Chouf Ouchouf シュフ ウシュフ』プレイハウス

構想・演出・舞台デザイン: ズィメルマン エド・ペロ 構成: ディミトリ・ド・ペロ

振付: マルタン・ズィメルマン 出演: タンジール・アクロバティックグループ

劇団コープス『ひつじ』ロワー広場

演出: ダビット・ダンゾン 出演: 劇団コープス

主催: 東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)
*東京文化発信プロジェクト事業

スイス&モロッコのアート・アクロバットと、妙にリアルな羊が登場

これからのダンスの鉱脈は何か?それは「強い身体性と高い芸術性を併せ持った舞台」である。そこでヒップホップとサーカスが注目を集めているものの、後者の中でも筆頭にあげられるのが「アート・サーカス」の雄、ズィメルマン&ド・ペロ(スイス)である。マス目状に区切られた四つの部屋がグルグル回る『Hans was Heiri』など、視覚的な驚きと作品としての完成度も高く、その来日が強く望まれていた。

『シュフ ウシュフ』は彼らがモロッコのタンジール・アクロバティックグループに振り付けたもの。モロッコは古くからアクロバットの歴史がある。とくに

人が肩の上に立って何段にも重なる「ヒューマン・タワー」は、高い建物のない砂漠で遠くを見通すために古くから行われる「伝統的行為」だったという。

舞台は一見シンプルだが、高い可動式の壁が複雑に組み合わさり、刻々と形を変える。それは時に城壁にも街並みにも見える。ヒップホップ系の技なども駆使しつつ、躍動する身体の魅力が堪能できる舞台だった。

そして全編を流れていたのが、彼らの生活と切り離せない「歌」である。激しさばかりではない。遠くの砂漠に陽が落ちるモロッコの人々の生活と、満天の星空が結ばれるような詩情に満ちた舞

台だったのである。

もうひとつ、ロワー広場では特設の柵が作られ、『ひつじ』が上演された。媚びず、喰い、排泄し、交わる。リアルを越えたりリアルに、大人も子どもも釘付けになっていた。 文: 東越たかお(作家・ヤサケ舞踊評論家)



劇団コープス『ひつじ』



撮影: 河地信彦

Roots Vol.1 『ストリッパー物語』

13年7月10日(水)~28日(日) シアターイースト

7月31日(水) えぞこホール(仙南芸術文化センター/宮城)

8月3日(水)・4日(木) 北九州芸術劇場 中劇場

8月10日(土)・11日(日) 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 中ホール

作: つかこうへい 構成・演出: 三浦大輔

出演: リリー・フランキー、渡辺真起子/渋谷清彦、安藤 聖、古澤裕介、新田めぐみ、米村亮太郎、門脇 麦/でんでん

主催: 東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)
*東京文化発信プロジェクト事業

日本現代演劇史に残る戯曲への新しいアプローチ

現代演劇のルーツと考えられる60~70年代のアンガラ演劇、小劇場演劇とよばれた作品群。それらの多くは、時代の刻印が強く押された独自の演出手法や個性豊かな役者達による作品群として演劇史に名をとどめている。それらの「戯曲」に注目し、今を生きる若手演出家の手で21世紀の全く新しい作品として作ってみようというシリーズが「Roots企画」。その第一弾として、つかこうへいの『ストリッパー物語』を取り上げた。口立てと言っ

て、その場で台詞を役者に合わせて作っていく演出手法を特徴とするつかさんの作品だけに、活字になっているものだけでも、小説、シナリオ、戯曲と幾つもあり、さらに『ひもの話』としても残されている題材を、劇団ポツドールを率いる三浦大輔さんに再構成してもらった。三浦さんは、スーパーリアリズム的な手法で、些細なことから追込まれていく現代の都市の若者風景を舞台化して、国際的にも高い評価を得ている気鋭の演出家。東京公

演では、つか演出との違いを細かく指摘する初演時のつか作品を見た観客も多かったが、宮城県えぞこホール、北九州芸術劇場、びわ湖ホール公演では、渡辺真起子さん演じるストリッパーとリリー・フランキーさん演じるストリッパーのひもの、奇妙な「純愛」に大きな拍手が起こるなど、新たに甦った作品として確かな手ごたえを得られた。2015年冬に予定している「Roots企画第二弾」にもご期待下さい。 文: 東京芸術劇場スタッフ